



エイリスはこの王国で  
最も憧れを抱かれています  
人物だ。

戦争、飢餓、伝染病—  
人々を悩ませる不安を払拭するため  
いつも微笑みと祈りを捧げてくれる  
麗しき聖女だ。

王国の神官

# エイリス

雪のように濁りなく白い肌  
絹糸のように美しい髪—  
この王国で一番の淑女はと聞かれれば  
誰もがエイリスの名を挙げる。  
万人に対し慈愛の心を忘れない  
清廉潔白な乙女の導きの元、  
王国の人々は平和に暮らしていた。

しかし先の戦争により  
王国は侵略された。  
植民地と化した王国に対して  
まず行われたのは  
人々の結束力を弱めるための  
改宗政策だった。

改宗にあたり  
まず目を付けられたのは  
人々の心の拠り所になっていた  
エイリスだった。  
信仰の象徴として  
崇められていたエイリスに対し、  
侵略国がとったのは  
『血統の浄化』政策――

人々の前で  
低俗な種族との婚姻を宣言され、  
エイリスは信仰を集める淑女から  
ゴブリンの苗床として、  
身分を訂正された。  
そしてエイリスは、  
1年以内に妊娠、出産することを  
義務づけられた。

当然この政策に  
王国民から猛反発があったが、  
これはエイリスが  
自ら志願したことだと説明がなされると  
人々は戸惑いながらも  
この政策を受け入れるしかなかった。  
愛する王国民の命が掛かっている手前、  
エイリスは侵略国の政策を  
自ら受け入れるしかなかったのだ。





エイリスの仕事はその日から  
『ゴブリンと交尾をし子供を孕むこと』になった。  
元々神に仕える身として、  
貞操を守ってきたエイリスが初めて見たのは  
人間の2倍はあるのかという  
ゴブリンの禍々しい男根だった。



自らの身体を求めていきり立つ、それを受け入れるため  
人間よりも体格の小さいゴブリンに合わせ、  
健気に体勢を低くし、人生で一度きりの初体験を捧げる  
準備をするエイリス。  
ゴブリンはその状況を楽しむかのように  
挿入までに時間をたっぷりとかけた。  
その耐えがたい凌辱感に震えるエイリスとは裏腹に、  
女性器は挿入を受け入れやすくするために  
愛液をたっぷりと分泌させた。





遂にゴブリンはエイリスの秘所に  
自らの肉棒をねじりこんだ。  
ただでさえ初めて行う生殖行為、  
ゴブリンの突起が付いた男性器が  
エイリスの肉壺を隅々まで刺激し、  
エイリスは処女を散らすと同時に  
人生初の絶頂を迎える。

脳内に押し寄せる快楽の波に吞まれる  
エイリスに脇目も振らず、  
おかまいなしにゴブリンは本能のままに  
腰を打ち付け続ける。  
初めて味わう雌の快楽。本来であれば  
交わってはいけない種族同士の交尾だが、  
体内を暴れまわる生殖器によって、  
エイリスの体は本能的に自らの「つがい」が  
彼であると認識してしまっていた。

ゴブリン

ゴブリン

ゴブリン

ゴブリン

ゴブリン

ゴブリン



なすすべなく、ゴブリンの欲望のままに  
遺伝子を流し込まれてしまうエイリス。  
彼女の体は本能的に快楽によって痙攣し、  
ゴブリンの射精が完了するまでの  
身動きを封じた。  
自らの体内に精液を流し込む雄を  
邪魔しないようにする  
雌の身体的機能が意図せず働く。

ゴブリンの射精量は人間の5倍と言われ、  
さらにその分泌液には快楽を増幅させる  
媚薬成分が含まれている。  
これは元々異種族に対しても種付けを  
行うことが想定されたゴブリンならではの  
身体的特徴である。  
今まで色欲とは無縁の生活を送っていたエイリス。  
この日の射精はエイリスの脳内と身体に  
深く刻み付けられた。

エイリスとゴブリンの交尾は  
休むことなく続けられた。  
精力にあふれるゴブリンにとって、  
エイリスの体は格好の遊び道具。  
言葉の通じない相手に、  
身振り手振りで体勢を指示され、エイリスは  
ゴブリンが気持ちよく射精するための体位を  
何通りも覚えこまされた。

何とか快楽に押し上げられない様に  
男根が当たる場所を逸らそうとしても、  
人間の雄と違い、  
異種族との交尾をするために  
進化してきたゴブリンの生殖器は  
エイリスの快感のツボを  
決して逃すことはなかった。

本来であればエイリスですら  
腕力で圧倒できるような体格のゴブリンに  
支配的な体制で自らの恥部を差し出し、犯される。  
そして女性として最も屈辱的なのは  
自らの望まない相手から注ぎ込まれる子種。  
エイリスは、ゴブリンと1日中繋がったままの  
生活を送るようになった。



あー  
うめえ

あー

とまって  
おねがい

おっ

中でもエイリスが耐えがたかったのは、  
屋外での交尾だった。  
民衆の前にわざわざ連れ出され、  
かつて自分を崇拜していた  
王国民たちの面前で、  
白屋堂々生殖行為を強要させられた。

自分の主が射精をしやすいように、  
自らその体を支えて立つよう命じられ  
自分たちが普段  
どのような性行為をしているかを、  
国民に見せつけさせられた。  
植民地と化したこの国の民たちに、  
この行為を阻止出来る者は一人もない。  
エイリスが出来ることは、せめて  
この痴態によって絶頂する姿を見ないでほしいと、  
見物人達に懇願することだけだった。

みないで  
えええ

みないれ  
くうさいく



結婚から3カ月する頃には、  
エイリスはその体に新しい命を授かっていた。  
繁殖能力に優れたゴブリンの子供の成熟は  
人間よりはるかに早く  
種付けされた人間の雌は、  
短い期間で何度でも妊娠が可能である。

初めは屈辱を感じていたエイリスも、  
妊娠によって幸福感を抱いていた。  
雌として、自分に新しい命を授けてくれた  
優秀な雄を受け入れ  
その伴侶となれたことに生物的な  
充足感を得ていたのだった。

エイリスはこの感情を  
愛だと勘違いしてしまっていたが  
もはやその間違いを正せる人間は  
この国には残されていないかった。  
その後、エイリスはゴブリンの良き伴侶として  
27人の子供を出産し  
それらの子供とゴブリンと共に  
貴族としての身分を与えられ、  
王国国民の血税によって優雅に暮らした。















パン

パン

おっ  
あ  
あ  
あ

おっ  
あ  
あ  
あ

パン

パン

グ  
グ

グ  
グ

おっ  
あ  
あ  
あ

お  
あ  
あ  
あ

スッ  
ホッ

おっ  
あ  
あ  
あ

スッ  
ホッ

スッ  
ホッ

スッ  
ホッ

おっ  
あ  
あ  
あ

スッ  
ホッ

スッ  
ホッ

おっ  
あ  
あ  
あ

スッ  
ホッ

おっ  
あ  
あ  
あ



おっ  
↓

とまってー  
おねがい  
↓

っ  
↓

あ  
うめえ  
↓

ア  
ハハ  
↓

ガッ

ガッ

ガッ

ガッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

アハハ

みないで  
えええ  
↓

みないれ  
くっさ  
↓

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ

